

淨土

1980—8

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回刊行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別送達郵便物）第三十五号
昭和五十五年七月二十五日印刷 昭和五十五年八月一日発行
第四十六卷 第八号



三十三間堂にて



—三十三間堂十一面千手観音千体列立像—

夏の暑い一日、私は、京都洛東七条、三十三間堂に詣でた。

三十三間堂は、正しくは蓮華王院といわれ、十一面千手観音菩薩像を千一体安置する

有名な御堂である。東面して、南北にその名のごとく三十三間の偉容を張った御堂は、長大にして格調は高い。

燦々とふりそそぐ日盛りの暑さを嫌って、参拝順路に従って入った御堂の入口回廊は、すでにひんやりとした静けさがあった。

北側の回廊側面を歩みながら、正面の三十三間の長い大廊下を臨む角へさしかかった時、右手内陣の蔽そかな予感に、私は一瞬たじろいた。いつの間にか、先刻までの体中の汗はひき、立ち止まって何かを考えたいような気がしたが、自然に踏み出してしまった一歩が、私の心に突然の驚き呼び起こした。

転瞬、右目から左目へと入ってきた一群の御像が、私の心へ何かをささやきかけてきたと思ったら、もうそこは、大群の御像のざわめきであった。十一面千手観音千体の林立群像のギッシリと並んだ巨大な量観が、不思議な威厳をもって私を圧倒したからである。

その後、回廊をいかに歩んだかよくわからない。中尊観音像のドッシリとした偉容も、あまり覚えていない。ただ丈六の等身千体の群像列立の壮観が、私の心をおいつくしてしまった。

観音菩薩は、三十三身応現身の功德があり、三十三の姿をもつものとされている。だから今ここにある千体の丈六観音像も、実は三万三千体の巨群を形成しているのである。しかも、一々の御像が十一面千手観音ということであるから、四方・四維・上下の十方とこれらを越えた無限の彼方への十一方面へ顔を向け、さらには千手千眼の救済の力をもそなえているのである。

こうして千体の丈六観音像の大群が、壮大な響きを集めながら、私の小さな体と心にせまってきたのである。

茫然自失しながら、ようやく回廊南角まで足を運んできた時、私は思い切ってちよっとふり向いてみた。その時、一番手前の御像が何か呼びかけてきたようにも思ったが、私にはよくわからなかった。

八月号



廻向と言うは、かの国に生じおわ
りて、還って大悲を起し、生死に
廻入して、衆生を教化するをまた
廻向と名づくるなり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.124)

目次

法話

盂蘭盆にあたって……………北 邨 謙 順……(2)

■随想■ 伊豆高原—私の城ヶ崎海岸—……………木 下 隆 一……(9)

特 別 寄 稿

死の受容

—法然上人の教えをいただく—……………吉 田 勇之助 ……(6)

訪中余情……………細 田 隆 善……(14)

悦びの中の悦び

—恩師征本戒浄上人とのめぐりあい—……………石 田 義 信……(16)

〈連載〉

一つの道(二)

—わが教えの子のこと—……………戸 川 靈 俊 ……(20)

絆(きずな)【三】

—誰れがこの子らをそうさせたか—……………森 邦 夫……(28)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(26)

〈表紙のこぼし〉赤のまんま……………土 屋 正 男……(25)

〈表紙裏・巻頭言〉三十三間堂にて

念仏ひじり三国志⑩ —法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(34)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

法 話



盃蘭盆にあたって

北きた邨むら謙けん順じゅん

(南尾柄市西念寺住職)

“うどん供えて 母よ 私も頂きまする”

(山 頭 火)

昭和の初め頃に没した放浪の俳人の句であります。特に解説を要しない簡明な句であります。それでありながら山頭火の心境がひたひたと伝わってくるものがあります。自然でわざとらしさがなくて、そのままでありながら、何ともいえない切なさを覚える句であります。

彼の山頭火が、どこで、いつ作ったのかも存じませんが、あるいは、お盆の頃ではなかったか、などと空想するのであります。道具として殆どない裏ぶれた一人住いの

鹿屋にいて、心あつき人から一食に足るばかりの、うどんの供養にでもあずかったのでありましょうか。その時、彼は、亡き母を想い起すのであります。一人で餓鬼のように、胃の腑の中にすすりこむのでは相済まぬ。母にも供えて、そして頂こう。母も喜んで受けてくれるに違いない。母親として見るならば、自分は極めて不肖の子であります。不孝者めでございます。勝手にさまよい歩いて、どこに居るのやら行方も定まらぬ我が子を案じて、母はどんな思いで死んだのであろうか。どうやら今日も夕食にありつくことができた。できたからといって全部一人で食べてしまうのでは母に相すまぬ。母よ、

お供えをしてから私も頂きます。母よ、私も頂きますの、まするがいいと思います。垢まみれの頭が下っている情景が浮びます。

私は実は、甚だ僭越な使い方をさせてもらっております。母よ、を、父母よ、と改作をして用います。

“うどん供えて 父母よ、私も頂きます”

という次第であります。山頭火が“父母よ”と呼ばないで“母よ”と限定をしたのには、彼の母親に寄せる並々ならぬ想いがあったのに違いないのです。ですから“母よ”でよいのですが、これを敢て“父母よ”と使うのは、私の甚だ勝手な方便でありますので、山頭火さんの霊前にお許しを願うばかりであります。と申しますのは、一般の方に対してお話などをいたします時は、父あり母あり子ありということで、その場合に“父母よ”というのであります。

さてその「父母」ということであります。孟蘭盆は、その父母を正客とするつとめであります。これは孟蘭盆経というお経を拝読しますと、直ちにうなずける事柄で

あります。経文に従って申しますと「七世の父母」「現在の父母」と出て参るのであります。

ここで不思議がられる方もあろうかと存じます。お盆というものは先祖のみたまを迎えてつとめるものとばかり思っていたが、七世の父母は兎も角も分るとして、現在の父母までもお盆をするとは何かということであります。然しながら、経文を見ますと、必ず出て参るのであります。七世の父母とあるのは、とりもなおさず先祖代々に違いない。その先亡代々の霊と現生の父母のために孟蘭盆というものをを行うのだと経文には書いてあるのです。更に詳しく申しますならば、先亡と現在の父母のために「孟蘭盆を行じて、その父母長養慈愛の恩に報ぜよ」と仰せられてあるのであります。

私は、そこで先祖代々の霊はもとより、現在の父母のためにも、報恩行としてお盆がつとめるものであることを、私共の忘れてはならない心得として強調したいと思えます。

通常は、お盆のことを精霊まつりあるいは魂まつりといえます。これはまさしく七世の父母に相当するところの先祖のみたま——精霊を迎えてつとめる孟蘭盆の姿で

あります。

ところが、別に、「生きみたま」と称する行事があることをご記憶でありましょうか。今日では大分行われなくなりしましたが、それでも農村の地方で行われているのを存じております。その「生きみたま」こそは、現在の父母に対して行行報恩行なのであります。大体、土用に入つた七月の下旬から八月の初頭にかけて行われているのです。この生きみたまの行事は、子や孫達が我が家に集つて懇親会を行うのですが、それを懇親会と呼ぶずに「生きみたま」と云うのであります。私共の昔の先祖は、この經文のお指図に従ひまして、片方は「たままつり」として盂蘭盆を、一方で「生きみたま」と称して現在の父母に対する年に一度の慰労会をして来たのであります。今日これが行われなくなったのは、種々事情もあらうかと思いますが、やはり私には淋しいことであります。けれども、たとい今から特別に生きみたまを改めて行わずとも、その精神だけは是非伝えてほしいものと念願するものですが、いかがでありますようか。

さてその精神がどこかに生きているかを尋ねてみたくなります。「盆と正月」といって、国民の二大行事があ

ります。その時は、全国の企業も会社も休みになる。国民の全体が、一部の方を除いて仕事を休むのは、この二大行事に違ひない。さて何故休むのか。休むことになつたのか。いやそれは年に二度位は休むことにしないといけないから。いやそれは皆が休むから。いやその時でなければ故郷へ帰れぬから、いや一せいに休めば友人にも会えるから。……様々な答案がでてきそうですが、何故それが、盆と正月になるのかというと分らなくなる。実はこの根本の意味は「先祖の霊が我が家に帰る時」であるからであります。現今では、その本来の意義が色あせまして、唯休むもの、遊ぶものという觀念だけが浮出たしまつたようであります。そこで先祖まつりを忘れて、海に行く、山に行く、避暑に行くことになりました。さてそれでよろしいのでありましょうか。すでに申しました通り、休む目的は先祖のまつりのためにあるのであります。それ故にこそ大部分の人々は家族もろとも、大へんな混雑の中を汗をふきふき、あるいは列車で、あるいは自家用車で、遙々と故郷へ帰るのであります。これを帰省列車、帰省バスなどというわけです。

さてまた考えるのでありますが、なぜ「帰省」という

のでありましょうか。帰る、というのは本元にもどる意味があります。省とは己れをかえりみる意味でありましょう。つまり己れの本元をかえりみることであります。

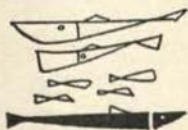
己れの本元——生命の本元とは何ぞや。即ちそれが先祖代々でありそして両親に違いありません。つまりお盆の精神がそこに生きている姿であります。お盆に故郷に帰るのは、自分達家族にとって、年に一度のささやかな慰労に違いありません。そうですけれども、その根元には先祖と両親とを省る精神があつて、その目的を果した上で自分達も有効に楽しめばよろしいのであります。

こうしてお盆の姿を一つ一つ見つめて参りますと、ここに仏教の精神が貫いて生きていることに驚くのであります。仏教では「自利利他」の精神が極めて重要なものとなります。「二利円満」とも申します。自他共に利益を同じくする精神です。自他法界同利益といひます。自分だけが楽をするのではない、共に、同じく楽しみを分かちあひましょうということです。山頭火が「うどん供えて 母よ 私も頂きます」の精神であります。善導大師の「願共諸衆生」の精神です。皆さんと共にいふ願心です。

お盆では、先祖も生きている者も共に二利円満する姿となります。「盆おどり」はお盆になくはならぬものとなりました。この盆おどりも、祖先の霊と現存の私共とが楽しみを共にする場面なのであります。もしも生きている者共の楽しみのみのものであるとしたら、盆おどりでも何でもありません。唯、お盆にかこつけて踊る舞踊会です。盆おどりにつきものは「櫓」であります。今ではその上に乗っているのはスピーカーであります。その実はあの櫓は先祖の霊の招待席なのであります。その祖霊をかこんで輪になって踊って、先祖を喜ばせてあげると共に私達も夏の一夜を楽しく過すのであります。私共はこの二利円満・願共衆生の仏教の精神をお盆の行事の中に生かした、祖先の智慧をすばらしいことだと思ひます。

その精神が、どこまで生きているかよく分らないというのが現在の姿でありましょう。ことによると、先祖や現在の父母が、折角のお盆に悲しみの涙をそっとぬぐうことのないように、改めて願共衆生の姿でお盆を考えていただくことを念願するものであります。

特 別 寄 稿



死の受容

——法然上人の教えをいただく——

よしだ ゆうのすけ
吉田 勇之助

○

予科から大学部にうつった一九二〇年頃から死ということに漠然と関心を持ち始めた。死に関する書物、死という文字が題名に入った小説類まで、いろいろよく読んで。死への関心が恐怖にと移ったのは卒業後、一年志願兵として軍隊に入った時からだ。濟南事変、満洲事変、日中事変、充員召集令状の受領、親友二人の戦死、第二次世界大戦、東京空襲疎開等々死への恐怖は上昇線をた

どり、終戦のラジオ放送を聞きほっと一息ついた。我にかえった時、死に対するノイローゼでなく、もっと心をしずめ、死を凝視すべきではなからうかと思いいったたのである。

天寿を全うして眠むるが如く生を閉じる死もある。そうありたいがそれは極めて稀である。癌の凄惨な末期症状の激痛に苦しめられつつ生に別れを告げていった身内の二例を知っている。死にはこの様に断末摩の肉体的苦痛と、生前に於ては全く予知不可能な死後の世界に入る故の恐怖と両面ある。

必然的にやってくるもの、そして何人にも平等にやってくるのは死である。死を考えるのを避けよう、死は忘れようとしても、生きている以上、死のことは切りはなせない。死について無自覚であれば死の恐怖は出てこないであろうが私はそうはなれそうもない。

無常、人間の自己の有限性についてはいつも考え、それが頭をはなれない。永遠の謎であるこの死を見つづけながら生きねばならないのが人間である。苦しさにたえかね死を願うものも、死は恐ろしいので、いざとなると生きたくなる。

人生のどん底生活が描かれているゴリキヤの不朽の名作『どん底』の中に出てくる巡礼のルカ老人と、貧と病いで死の訪れも近い不幸なアンナとの間にとりかわされる会話が私をとらえる。

死ねば楽になり、あの世にはなんにもない。神様はアンナを天国でゆっくり休ませて下さる等々ルカ老人はアンナを慰める。すると、アンナが「もうすこし……あたしは生きたいんだもの……もしあの世に苦しみが無いのだったら……この世でもうすこしぐらい苦しんでもいいの……」このくだりを読むと、死、虚無への恐怖が出て

いるのがわかる。



終戦以来、気持も落ちついてきた。或る日一つの言葉が頭の中をよぎった。そして、これが私を仏教に結びつける御縁になったのである。それは、大学の予科の頃、講師の吉田絃次郎先生が講議の中で、「機会があったら歎異抄を読むことをおすすめします」と申された言葉だった。

疎開先から帰京し、まづ『歎異抄』を求め、読んだが一読ぐらいでは中々理解出来ない。經典講話、解説書等をよく読む。仏教講座にはつとめて出席する。在家仏教協会を知り、入会をしたのが一九五五年（昭和三十年）六月。爾来、定例講演会にも参上している。

さて、親鸞聖人にとっては師であり、よき人として仰いでいる法然上人に対しての一般の関心度は高くない。これは何故なのか。ところがこのことで上人に対する私の関心は逆に高まってきた。

それは、『勅修御伝 法然上人行状絵図』を読んでい

るうちに、この偉大な宗教者法然人に対しては、私は深い親しみと限りない尊敬を抱くようになった。傾斜していったのである。

上人を讃仰する団体でもあればよいがと思いながら電話帳でさがしてみた。法然上人讃仰会があったのだ。そして一九六六年（昭和四十一年）四月入会。以来『浄土』誌を通じ大変教えられている。その後、『浄土友の会』という有志の集りが出来、世話人先生方の御自坊で講師を招き、御話を聞いたり、時には食事を共にしたり有意義且つ楽しいものであった。近年、催しから遠ざかっているのがいささか淋しい。

○

長い年月を経過してやっと仏教に心向ける御縁が生じたのであるから、しっかりしたものに育っていくようつとめている。

宇宙的大生命ともいうべき命の大きな流れに浮んでいる「うたかた」のような自分はやがて死ねば、このもとの流れに戻っていく。一切平等空寂の世界に入る。こう

いうふうにうなづいてみても、死によって未知の暗い世界に赴くことの恐怖は消えない。知的な考え方にのみとらわれて、浄土とか永遠とか真理の世界というものを合理的にわかつくとしてもそれは出来ないことだ。

学生時代によくお話を聞いた牧師さんからいただいた立派な金縁カードの死亡通知状のことを思出す。文章は忘れてしまっているがそれには、「……よろこんで主のみもとに赴く……」とあった。これこそ敬虔な基督者による死の受容だと思う。

良寛和尚は、その法語のなかで、「……死ぬ時は死ぬがよろしい……」と申されているが、これは凡人のなかなか到達し得ない境地である。

また、「……法然上人は、どうにもならぬ暗い必然性に対して――往生――という自発的なよろこびをプラスすることを発明した」と、武田泰淳氏が書いてあるものを読んだことがあった。すばらしい死の受容であると思う。

死に対する恐怖はどうしようもない。ただ法然上人のおしえをいただき、信じ、宇宙万象をかくあらしめている自然の理法におのれをまかせていく以外に救いはないと、やっと気がついてきた。



伊豆高原

— 私の城ヶ崎海岸 —

きの した りゅう いち
木 下 隆 一

(随筆家)

○

いま茅屋が建っている伊豆高原の土地を求めたのは、昭和四十七年であった。

発売元である電鉄会社の稲葉さんという若い営業部員が、終始よく面倒を見てくれた。

寡黙ではあるが誠実な人で、もし彼に営業マンにありがちな押しつけがましさが少しでもあったら、私は買わなかっただろうと思う。その彼が、すべての手続きが終った後、もう一度私たちを現地へ案内して、
「ここからはよく海が見えます。お住居は是非二階建になさって下さい。私からはそれだ

けをお願いします」

と言った。時あたかも七月の半ば、周囲の木々は繁りに茂っていて、私の視野には海の欠片もなかったが、地元で生まれ育って、小学生の頃はよく兜虫を採りにこのあたりまで来たという彼の言葉に偽りがあるはずはないだろうと、私は思った。

五年後、ようやく家を建てたが、その年は夏から秋にかけて、稲葉さんの言う海を見ることは出来なかった。十二月半ばのある日、小春日和の朝であった。

「あなた、海が見える！」

女房が一階のリビングルームから、二階で寝ていた私を大声で呼んだ。

「あなた、窓開けてみて！ 海が見えるのよ！ 見えるでしょ？」

雨戸を繰ると、大方葉が落ちた木立の向う、手の届きそうなところに、海は銀盤のように輝いていた。利島も見えた。

いまにして思えば、私たちは実際の海面より

りもより高い空間に海を求めていたのである。それからは四六時中海はあった。たとえ雨や霧、霽に視界をとざされていても、

「ああ、今日も海が見える！」

と、海の彼方のひとり娘ひろみに思いを馳せて、無事を祈るのであった。



家から城ヶ崎の海岸までは歩いて十分ぐらいである。直線距離にすればいくらない。指呼の間に海を望めるわけである。

私が散策する城ヶ崎海岸は、自然研究路と呼ばれている遊歩道である。海洋公園を境にして、北行するのがピクニカルコース、南行するのが自然研究路と名付けられていて、全長約十キロの断崖と岩礁地帯が続いている。友を誘い、犬を連れて、幾度この道を歩いたことか。とは言っても、『私の城ヶ崎海岸』は、北の門脇岬の吊橋から南の橋立の吊橋ま

での約六キロを指す。もっとも最近の家から一番近いところから約二・五キロ南行して橋立の吊橋まで行くか、一・五キロ北行してイガイ根まで、と距離は縮まっている。道は割合整備されているが、随処に急坂があるので、これだけ歩けば充分である。

この稿を書くにあたり、久し振りにとよからイガイ根まで歩いてみた。雨あがりの道は松の落葉が濡れていて滑り易く、歩きづらかった。晩秋から春先にかけて道の辺を彩っていた石路の花は終り、額紫陽花の花にも早く、海の遊歩道としては華やかな色彩に乏しい時期であったが、新緑が山のものとは一味違って感じられたのは、海の気を充分に吸っているからであろう。

この海岸は、太古噴火した大室山の熔岩流が海へなだれ込んで出来たもので、高いところでは三十メートル以上の絶壁を成しているほかゴツゴツした岩場で形成されているので海水浴場には向かず、専ら磯釣りのメッカと

して釣人に親しまれている。しかし、ここからの景観は素晴らしい。変幻自在な雲の姿、光線の当り具合によって刻々色を変える海面、往来する大小の船影、水平線に浮ぶ大島、利島、よく晴れていれば新島、式根島も遠望出来る。これで大島から噴煙があがっていれば言うことないのだが、三原山の御神火が絶えてもう何年になるだろう。晴れて良し曇って良し、荒れて良し風いで良し。四季それぞれに趣きがあつて、決して見飽きることがない。私は山よりも海の景色が好きである。ひよっとすると、私の遠い祖先は黒潮に乗つてやつて来た海人族だったのかも知れない。

一昨年の秋、近所の人に誘われて夜釣りに行つた。私は当然とよからどこかの磯へいるものとはばかり思っていたのに、その人はとんでもない方へすいすい歩いて行く。そしてひょいと林の中の細い道へはいって行つた。「磯釣りに来る連中がつけた道でね、これを行けばイガイ根に出る」

その人は言った。山には杣道というのがあ
るが、さしずめこれは磯釣り道とでも呼ぶ道
であろうか、と私は思った。のちに、海岸の
林沿いの道を歩いてみると、あちこちにこれ
に似た磯釣り道があった。それぞれ自分の縄
張りの磯へ通う釣り人たちが、長い歳月を費し
て踏み固めたものようである。

根というのは海へ突き出した岩場のことを
言うらしく、ほかにナガ根、マル根と呼ばれ
る磯もある。イガイガ根は広い岩場で、根も
三つ四つ突き出している。文字通り熔岩が栗
のイガのように小さな牙を剥き出しているの
で、とても長時間坐っていることは出来ない
が、林と岩場の間に天然の芝生があつて、ハ
イカーたちの憩いの場となっている。

「ここに岩の割れ目があるからね、ハイ、ビ
ヨンと飛んで」

言われるままに、私はビヨンと飛んだ。こ
れが釣り場への関門であつた。月のない、少
し荒れ気味の夜で、柱状節理の断崖へ打ち寄

せる波の音が無気味だった。夜目にも白い波
頭がさあっと断崖を駆け昇ると、その下に深
い洞穴があるらしく、二拍おいてドドンと波
の音が地軸を揺がして反響した。結局その夜
は釣果なく、一時間ほどで竿を納めた。

「明日は昼間メジナをやりましょう」

翌日、同じコースを辿つてイガイガ根へ出
た。そして私は前夜ビヨンと飛んだ場所に来
て愕然とした。岩の割れ目は五十センチほど
だが、はるか下で波が渦巻いているのであ
る。高所恐怖症の私は途端に全身から冷汗が
噴き出した。ようやく辿り着いた釣り場は汚
れに汚れていた。弁当の滓、清涼飲料の空
缶、カップ酒の瓶、ビニール袋、切り取られた
テグスの屑や釣りあげられて捨てられた雑魚
の死骸、ドロドロに腐つたアミコマセ……。
まるでゴミ捨て場である。俺は昨夜こんなと
ころに坐っていたのかと思うと、胸が悪くな
つた。釣人のひとりひとりがちよつと気をつ
ければ、磯の汚れは防げるものを。おそら

く、日本全国どここの磯も同じように汚れているのであろう。竿を振る気にもなれず、この日も一時間ほどで引揚げた。

「グミの実でも採って帰りますか」

天然芝生のあたりに、紅と黄の二種類の秋グミが熟れていた。どちらも渋味があって野趣に富んでいるが、その人は黄色の方がうまいと言う。食べ比べてみたが、同じような味で私には区別がつかなかった。

今年の初日の出はこのイガイ根で見た。娘の幼馴染の男の子が四人来て、海の初日が見たいと言うので、私が案内したのである。遠く一朵の雲を置く初茜の空をバックに、紫紺の大島が浮び、珍しく海は風いでした。雲の縁はすでに金色に輝いており、日の出間近を思わせたが、日はなかなか昇って来なかった。しかし、三原山の左肩から一条の光が中天に射すと、あつという間に太陽は顔を覗かせ、ゆらゆらと昇って来た。壮厳と言う以

外に言いようのない海の初日の出であった。

「今年は、きつとみんなにもいいことがあるよ」

家を出てから帰り着くまでの間に、私の口から出たのはこの一言だけであった。



城ヶ崎海岸一帯を一番美しく眺められるのは、伊豆急線北川駅きたがわの下りホームの端である。私は思う。それも順光線となる午後がいい。左から右へゆっくり目を転ずると、大室山、樹海、断崖の続く海岸線、海、大島、利島と、素晴らしい景色が一望出来るのである。

ここまで書いて、ふと私は思った。この原稿を投函したら、久し振りに北川駅まで足を伸ばしてみようかな——と。

今日も、城ヶ崎の断崖は白い波濤を駈け昇らせているであらうか。

訪 中 余 情



ほそ だ りゅう ぜん
細 田 隆 善

(東京・三好勢至院住職)

中国の群れなす人の行き交へる

同じ服を着て同じ靴はく

中国の訪ひし寺々なべてみな

禅と念仏合せ修する

通訳に好きな人はとこととへば

魯迅先生と墓を指差す

そのかみの阿部仲磨呂の眺めたる

洛陽の月中天に冴ゆ

白馬寺の磴の辺りは天平の

蔓の映画に映りしところ

竜門の毘盧遮那仏の顔は美し

則天武后をモデルにしたり

西安の孔子の廟は数多なる

碑石を集めて碑林となりぬ

西安の碑林の中に善導の

弟子の懷懺の碑文に佇む

王城の跡方もなき丘の上に

漢の瓦の断片を拾ふ

楊貴妃の裸身を浸せし浴槽は

赤き牡丹の描かれてありぬ

草堂寺を尋ねて登る道の辺に

杏の花咲き桃の花咲く

興教寺三藏法師の舍利塔は

麦萌え菜種の花咲く中に

香積寺の南に霞む山脈は

終南山なり悟真寺遙るか

香積寺の善導大師の層塔は

麦の青める畑中に建つ

香積寺の参道溢るる人垣は

拍手しきりにわれらを迎ふ

玄中寺の会議の庫裡は寒くして

石壁山の風身に沁みぬ

玄中寺の寺領に数多植え込める

山椒の木は芽立ちたる見ゆ

趙樸初は髪白くして温和なり

挨拶のとき笑みを湛へる

趙樸初は日中友好仏教の

交流のこと強く力説す

趙樸初は庭に見送り自動車の

去り行くまでも手を振り止めず

悦びの中の悦び

— 恩師笹本戒浄上人とのめぐりあい —

石^{いし}田^だ義^{よし}信^{のぶ}

(桐生光明会事務局)



知人の女医さんより聴いた話である。

生れつき全盲に近い弱視のA少年は、今県立盲学校(中学部)の二年生である。

小学部より中学部へ進んだ一学期、担任の先生から「私の夢」という題で作文を書くようにいわれた。(もちろん点字作文であろう。)

その内容は「僕は生れつき眼がよく見えない、もし十二時間だけでもよいから、ものがハッキリみえるようになれたら、そのうちの六時間は、やさしいお父さんとお母さんの顔をしっかりとみつめて覚えたい。あとの三時間は、上毛三山(群馬県を昔毛^{はけ}の国上毛と呼んだのでその中の

美しい赤城山、妙義山、榛名山)が美しいと聞いているので、ぜひその山々をみたい。またテレビの色がきれいだというからカラーテレビもみたいと……。

正常に眼がみえているものにとって、いつでも見られる両親の顔、自然の風物、テレビの画面が、この少年にとっては全く想像の世界なのだ。聞く者の胸をつまらせる作文である。

担任の先生は、その子のやさしい両親がどのような心で、この子を育てたのか、その作文の内容を伝えるとともに面接して伺った。

すると、「あの子が産れた時の、今は亡き祖父母のこ

とばを守っているだけです」と。

その祖父母のこととは、「盲の児であつても、誰彼を責めるでない。子供は授りもので、預りものののだ。

あのような子は、夫婦仲よく、両親の愛情で、しっかり見守つてやらないと、早く世を去るだろう、これが爺々婆々の遺言と思ひなさい」と。

子供に対する心づかい、この家の人々の温かい愛情が感じられて頭が下る。きつと信仰深い老人であつたにちがいない。このような障害を背負つて生れ出た子を持つ家庭の人々の心労は大変なもので……我々はこの平和な世に、五体満足に生きられる幸せな命をかみしめるべきである。

山崎弁栄上人（一八五九—一九〇二）の道詠に、

一、仰ぐも畏しこき　み親より

預りにける稚児なれば

み旨の児等になれかしと

ただ旦夕にいのるなり

二、神聖　正義のミオヤより

あづかりにけるこの稚児を

もしもみむねに背かせば

われこそ地獄の薪なれ

（ミオヤとは阿弥陀仏をお呼びして申された）

天地宇宙を身とし心とされる生きて在ます阿弥陀さまより、授りお預しているかけがえのない稚児なのだ。仏子を育てる心づかいで育児に励むべきで親の責任は大であるとおさとしてある。

眼がみえ、話ができ、耳が音をききわけられることは当りまえと思つてゐるが、左右の眼で同時に見て、二つのものに見えず一つにチャント、ハッキリ見え、二つの耳で同時に聞く音が一つのまとまった正音に聴き分けられるにつけても、きく主（聴覚）みる主（視覚）等の感覚器官がそれぞれ独立した主人公でありながら、そこに統一的主体（弁栄上人新造語）が完全な働らきをする。

人体のコンピュータが、全宇宙を統攝する阿弥陀仏の意志に直結している、神秘不思議に気づくべきである。

我々にとって現代は信仰を求めるにもっとも困難な時

代である。然し幸いにも私が今日こうして念仏生活が続けられるのも、昭和の初め神奈川県二宮町の知足寺（浄土宗故相馬千里師）における笹本戒浄上人御指導の別時念仏会に参加できて、善知識の戒浄上人とのめぐりあいの勝縁が与えられたからである。

導師上人の人格、玲瓏玉の如きという言葉のとおり慈悲、温和、謙遜の徳を体せられ、別時の本尊仏（三昧仏画像）を礼拝する姿は、まさに恭敬尊重、活ける大慈悲の阿弥陀仏今現にま正面に在ますの実感にて、至心に礼拝せらるる御態度に接し、またご説法の言々句々はひとえに如来の實在と大慈悲を伝えんと、微に入り細にわたる、くりかえし説かるご自身の信仰の二大恩人と崇められた兄弟子の宮本戒善上人と恩師弁栄上人との値遇そのご指導を蒙られたご人格とそのご内証の事実、念仏三昧発得の道ゆきについて時に涙され感極まって絶句されたことがしばしばであった。また光明主義の聖典の「如来光明礼拝儀」のご講話、夜は上人独得の「真実の自己」について論理的心理学的なご指導によって信仰の燈を点ぜられた。これひとえに宿世の因が今生に果を結んだものと感涙にむせんだ別時であった。

上人ご自身が歩み求められた苦惱脱却の道禪より念仏への回心の道でもあった。

三昧発得の聖、弁栄上人よりの伝承教学の粹に加うるに、上人の深い学識と真摯なる念仏三昧の実践よりほどばる説得力に富むご説法は、一貫して「如来の實在と、その本尊論」、そして弁栄上人ご自身念仏三昧発得の実証によったのである。

法報応三身即一独尊統攝帰趣に在す、超在一神の汎神の阿弥陀仏、報身は本有無作の法身の最高中心に厳臨し、法身内蔵の万徳の粹はその妙色相好身と現われ万徳の中心の中心は慈悲のみ顔に現わる、衆生の念ずるまま正面にまします慈悲のお顔を憶念して口にみ名をナムアミダブツと称えることは大乘仏陀釈迦の三昧を得させていただく道である。

元来念仏は一宗一派のものでなく世尊の救済の粹である弁栄上人は我々に垂示された

「唯絶対無限光寿即ち弥陀の聖名を崇じ聖意を仰ぎ、それに帰せんが為に弥陀の身を憶念し、口に弥陀を称え、身に弥陀の行動を實現す一念弥陀なれば一念の仏、念々弥陀なれば念々の仏、仏を念ずる外に仏に成る道なし三

世の諸仏は阿弥陀三昧によって正覺を成ずと南無」と。

善導大師も現身に往生極樂の証を得たる三昧発得の聖者「偏依善導専ら法然上人も現証を得たいと念仏され、

我は唯仏にいつかあふひ草

心のつまにかけぬ日ぞなき

かりそめの色のゆかりの恋にだに

あふには身をも惜しみやはする

あみだふと心は西にうつせみの

もぬけはてたる声ぞすずしき

戒浄上人は昭和十二年（一九三七）日華事変勃発の七月二十一日より五日間、京都洛北古知谷阿弥陀寺にて別時念仏を指導され翌二十六日横浜慶運寺のご自坊に帰山同日午後九時四十五分忽然として遷化せられた。御年六十四歳まさに無常迅速の活説法であった。上人のご生涯は靈応内に充ち、研学修道、教化伝道、光明主義の真髓を学解の面に現身証得まさに身も心も如来の慈悲を伝えんと獻げつくされた大宗教育家で、そのご遺徳を慕うものに輝しい光を放っている。そのご恩に報うるにご遺訓を体

し念仏三昧に励まねばならない。

私は東京光明会の橋本徳三郎居士ご夫妻に導れて、上人の月例会の講話の速記に、機関誌「心光」の発刊にたずさわった。その内容はことごとく光明主義中心道を伝え、弁榮上人を法然上人釈尊の再来と仰がれ、勝妙なる正境への慈悲を伝える言々句々であった。（笹本戒浄上人全集は近く刊行予定）

私の母はよく念仏を申し笹本上人のご指南どおり弥陀欣慕の念仏を重ねた。病床生活二十年におよんだが愚痴を一言も申さず日々感謝の中に九十四歳の天寿を全うできた。如来さまの慈光を蒙ったその顔に柔和な光が常に感じられた。

長かった私の軍隊生活（昭和十五年～二十四年まで）にも毎日陰膳を供えて無事を祈り、特に戦後四年間は、舞鶴の港に我子の無事の帰還を待ちわびる短い文面ではあるが（年々正月に書いた）母情がしたためられ恰も岩壁の母に似た封書四通を手にし感涙にむせびその不孝をわびふしぎな命を有難くかみしめるとともに念仏精進の母、恩師笹本戒浄上人のご恩に報うるためにも念仏精進を誓うものである。

一つの道(二)

—わが教え子のこと—



戸川 霊俊
とがわ れい しゅん

(京都市・黒谷西住院住職)

およそ、出家の動機というものには、人によって異なるものがあるが、要するに他の力によってさせられるか、みずからが自らの内的必然に催されてなるかの何れかであろう。

すなわち、宗教がその人間にとって外的であるか、内的であるかの相違である。

今では、ほとんど経験されなくなったが、淳朴な念仏信仰の仏心篤い農村地方で、かつてみられた「一人出家すれば九族天に生ず」流の思想が動機での物心つかぬ幼童期の出家のごときは、自らが自覚して主体的に選びと

った道でないという意味でまさしくさせられた出家の部類である。させられた出家が、出家のあり方として本来的でないというのではない。それはそれとして仏縁の催おすところとして尊いものがある。

今日、問題となっている寺院の後継者の問題にも拘わる「寺に生れたから、寺のあとを継がねばならぬ。継がせねばならぬ」の理由での出家も同様と言えよう。

さる日、瀬戸内寂聴さんが出家の動機について——作家には行詰まると自殺するという例がある。……わたくしも自殺を考えたことがある。しかし、そんな折、日本

には古くから自殺するに代えるに出家するという手のあることに気づいた——と言うような意味のことを話されたのを何かの機会に聴いた記憶がある。

させられるというのでなく、するというのは、そのような場合の動機を言うのであろう。「最愛の肉親を亡つて」「恋愛に破れて」「世俗に敗れて」等々の無常感・絶望感。自己の罪障深重におののく罪悪感・宿業感——それにたじろぐなく、却てそれが動機となり契機となつて出家得度に転回するのは、主体的に宗教を自己のものとする意味において尊いものがある。

いま、多田妙鳳尼の場合はどうであらう。

彼女（この呼び方は、いまはふさわしいかどうか）は、他者に強いられて出家させられたのではない。寧ろ、肉親という他者から厳しく反対されながら、敢てそれを押し切つて自らの内的必然——これは和辻哲郎先生の言葉——から、それが動機となつて出家得度を求め遂げたのである。しかも、その動機には、いささかの暗い感じで受けとられる無常感も厭世感も、罪悪感も絶望感も認められない。いわゆる深刻という気配は些かも見受けられない。

宗教心理学者ウィリアム・デュームスが宗教入門の二つの類型 病める心の人 (the morbid minded) と 健康な心の人 (the healthy minded) と、その後者にふさわしいものであろうか。

それゆえに、私は妙鳳尼の尼僧としての、宗教者としての、これからの彼女の人生の展開に大きな関心と、それからそこばくの不安の念をもつのである。

教え子を信じるが故に、信じてその出家得度に快く賛じた私が、今更彼女について不安を口にするのは矛盾めいたことであるが——。

亀井勝一郎氏の言葉に——自分は親鸞聖人には参じるが、本願寺教団は認めない——とあるのを想起するが、彼女もまた、純粹な心情で日蓮聖人に直参した。法華經に直接した。法華經の行者日蓮聖人と彼女の間には、何ら交りをさえぎる爽雜物は存在しない筈である。これが神性なるものと私、絶対と相対が表裏一如であるべき本然の宗教の姿である。

しかし、現実には、われわれは宗団とか教団という組織に包みこまれた自己なのである。

宗団なり教団なりは、仰ぐ宗祖なり開祖なりを中心

に、その行履に倣うべく相互の切磋琢磨のためと、ひとりならば、ともすれば墮ちようとする同信相互の信仰策励のためには、その存在は無意味ではないが、他面、永い組織の伝統のうちに、積み重ねられた、祖意と遙かに離れた積弊集團悪の塊に化している部分がありはしないか。

私とは生い立ち（私は寺で生れ寺で育てられてきた）の違う彼女の、その宗団生活において垣間見るであろう宗団悪——こんな言葉の使用が認められるなら——組織悪に触れた折の対応のしかたに、彼女の出家の動機が純心であればあるだけ、それだけ私には不安となってくるのである。

「あなたの新しいお寺での生活は、どう？」私。

「すべてがはじめてです。外から想像していたのとは違うところもあるし、お坊さんの世界と、在家と変らぬところもあるし……」賢明な彼女は、私の問いに微笑みかえして深くは答えてくれなかった。

私は宗門生活というか、寺院生活において、彼女が出家以前に抱いていたであろう美しい期待の裏切られることへの失望に陥入ることを惧れると同時に、彼女の宗教

へのひたすらなる求道の熱情が宗団悪によって阻害されるのを憂えるのである。

「いまは、修行一本なので、お誘いを受けますけれど、今は成るべく教界のどの団体にも、出るのを辞退しています」

私の経験からしても、宗団の生活は、決して聖なる面とのみ限らない。妙鳳尼が出家の動機——目的からすれば、今はひたすら宗祖に直参して、生活の俗的な面には傍目をそらさぬがよい。

彼女の、人手の少ない大寺院での日々は忙がしい。真面目な、健康な彼女は、貫首猊下は東京の御自坊に、執事長上人は千葉の御自坊にあって御本山の日の無い日は特に忙がしい。

広い殿堂、数多の諸堂、境内の清掃、来客の応待、止宿寮生の炊事、全国檀信徒の参拝とその宿泊受入れに、一日は暮れる。

彼女の存在は、寺にとってまことに重宝なものがあろう。

その重宝さ——喫茶喫飯典座の業は、道元禪師も述べておられるように仏道修業には必須であることを否むも

のではないが、更にその奥に、或はそれを超えて、日蓮聖人への傾倒、探究の修学がこれからこそ彼女に求めらるべきであらう。

「失礼だが便利な僧形をしたお手伝いさんになっては駄目だよ」——私の言葉を俟つまでもなく、「貫首さまも身延の方でもよく、東京でもとおっしゃって下さるし——」と応えてくれた妙鳳尼は恐らく、近き日、東京上大崎に究学の間を求めるのではなからうか。

若き尼僧多田妙鳳尼香のことを、私は、ある日、仏教大学での講義の合間に話したのである。時間が終ると「私は妙顯寺に下宿して妙鳳さんのお世話になっている者です——」と名乗り出た女子学生があった。

それから共通の友妙鳳尼を介して、その学生と親しく接するようになり彼女の身の上をも知るようになった。

彼女は、婦人警官として一度は社会に出たのであるが、非行化の激増して止まること知らぬ青少年の補導対象の心構えには、宗教殊に仏教による人格教養の切要を痛感し、職務の間に通信教育を受講していたのを、ついに職を一擲して通学課程に転入して、京都に來たのだと

いう。

そして下宿先として求めたのが大本山妙顯寺での妙鳳尼との出会いとなる。

妙鳳尼との交遊の間に、おのずから日蓮大聖人の思想に傾倒し、彼女また世俗の女性の生活を超えるかの風が察しられたのであるが、大学院の課程に、華嚴の研究に専心すべく大谷大学に進むのが機縁となって、有望の華嚴専攻青年学徒と縁結ばれることとなった。

五月若葉の香ぐわしい一日、岐阜市長良川畔のホテルでの結婚披露宴に、私は、多田妙鳳尼と一緒に京都から招かれたのである。

新郎一色君の恩師山田亮賢教授夫妻の媒酌による。その宴席では、大谷派の学匠たち、篤信のその自坊の門信徒達の居並ぶなか、友人代表としての祝辞を妙鳳尼は心こめて、憶せず南無妙法蓮華經と唱えて閉じたのであった。

——よき友、多田妙鳳尼と、その尊い青春のひとつときを、道を共に語ろうたことは新婦にとって、今の幸せにも等しい幸せであったこと。非僧非俗の、仏教の中でも特異な宗団で、他宗の寺院婦人とは異なる厳しい坊守の生

涯に、きみこそ、きつと素晴らしい道を辿るであらう

——と私ははなむけをしたのである。

孫に嫁本決りしてお正月

新郎の祖父であられる一色山上宮寺の老先住俳号経魚

師はこう詠じられた。

(つづく)

||新刊||

總本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願

布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

——仏教的視点より現代人への提言——

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。

B 6判 二四〇頁 価一五〇〇円

(下 一六〇円)

(申し込み先)

〒 381-12

長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺

振替(長野) 一四三二二

村瀬 秀雄 著

||新刊||

『和訳 六時礼讃』

善導
大師

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

||好評||

『和訳 觀經四帖疏』

善導
大師

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和訳 法然上人選 択集』

法然
上人

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和訳 浄土三部經』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

表紙のことば

「赤のまんま」

土屋 正 男

いぬたでのことを東京地方では赤のまんま
とよんでいる。全国的にそう謂うかどうかは
知らないけれども、これは子供たちが遊びの
中で付けた名前でなかるうかと思う程びつた
りと、また愛らしい名前でおままごとのごち
そうには、成程とうなずかれる花である。

そのくせなかなか強靱な草で空地の中でも
路傍のコンクリートの割目にも根を張り、風
に吹かれても人に踏まれても、茎はそのたび
節くれ立って逞しさを加える。

節くれだった葉鞘からは新しい枝々を出し
て、夏秋の頃には枝の先々に赤いやさしい小
花の穂をつづる。

時を同じに咲く妖艶なダリヤ、強烈なひま
わりに比べてこの可憐な赤い花は、秋陽の強
い光の下でも決してへこたれない強さを誇ら
しげに負けていないのである。

私はこの雑草の可憐な美しさが好きであ
る。

私はこの雑草の強さが好きである。

浄土句集

一田牛畝選

京都 安藤 寛
春愁や縦筋高き瓜を見る

大分 丹波 難中
遠忌了へ祖山静かに梅雨に入る

東京 細田 初枝
燕の巢旧家を誇る太き梁たき

雪で、境内の水子地藏の風車も舞うて、
音立てて大師を讀へ鳴っているようである。

東京 阪入 等遠
白壁の巢へつづも燕一文字

評 徳川時代より続く家らしい。その大きな梁に、燕が巢をかけ餌を運ぶのは誇りでもあらう。

福岡 高良 慈風
吹きぬけの廊下涼しと椅子並べ

東京 田中 秀代
アルプスを借景として桃の宿

山形 松田 允子
何はさてすこやか嬉し子供の日

評 作者の住んでいる所は廊下も長く風通しもよく、椅子に腰の年寄りは極楽。

東京 小笠原香祥
遠忌すみ三門に散る残花かな

評 腕白でもよいから健かに、である。子供の日は、親も無ぞ、将来を達者な子にと、楽しみである。

東京 栗原とも子
帰る娘に持たす苧茹おとろでて居り

東京 栗原やえ子
咲き満ちて花の命の惜まるる

東京 真野 竜
善導大師讀へて芝は花吹雪

評 苧は皮を脱って茹でると軽くなるのであって、母心とは有難いものである。

福岡 荒牧 還愚
千代尼墓詣つつと廊下の加賀の町

評 大師の法要の芝の大本山増上寺は花吹

藤咲いてどっと人出の里の寺

山梨 青山富貴江
父の日が父をしのぶ日七回忌

山形 松田 光誉

月山を遙かメーデーの旗つつく

井の頭花のトンネル花筵

東京 末常てる子

神奈川 松本せつよ
田水沸き目高すいすい泳ぎおり

福岡 稲永 新

目をとじて静かに念仏五月間

菜の花の中より声の返り来る
東京 阪入志津枝

山口 三井 寛静
芽木の空島の夜明けの心地よく

福岡 三牧 重利

麦熟れて散歩の道のたのしかり

ながながと法話も聴いて善導忌
東京 新井 新生

三重 山田 うた
老鶯や観音まつる山の寺

福岡 高良 幸代

仰ぎ見る古処の山々青嵐

春灯や数珠を繰りつつ南無阿弥陀
東京 大野いく子

福岡 前田 秀峰
友逝きし朝佗助の落ちにけり

群馬 島津 か寿

朴の花見る人もなく谷昏れぬ

春障子影をうつして話し声
東京 吉原登起子

福岡 権藤みきを
薫風に響流十方曉の鐘

三重 森 静枝

咲きはこる牡丹に雨のはげしさよ

花冷や問わず語りの声静か
東京 鈴木 葉子

福岡 国友 星畝
お念仏唱へて死囚更衣

東京 真野よし子

武士の学舎の跡春立ちぬ

新緑の映ゆる御賞に新住持
山口 上野 明達

福岡 行正 明弘
石壁の寺苑牡丹の大いなる

東京 猪瀬 幸子

味噌倉の軒の菖蒲に触れもして

埼玉 佐久間愛子
死刑囚に地獄宴説き教誨す
一田 牛畝

きすな
絆

【三】

——誰れがこの子らをそうさせたか——

もり
森

くに
邦夫

(町田市福祉懇談会座長
町田市ボランティアの会顧問)



×

×

×

“ひとり、僕はひとりだ

友達も、学校も、親も関係ない

僕はひとりだ

この部屋は無人島だ

誰もいない、僕はひとりだ

もう、たえられない”

見せてもらった、詩稿に書き残された文字のインクが

涙で滲んでいたのを、今でも覚えていた。

一年前、私の後輩の息子で、高三になる受験生が自殺したときの遺書である。

この遺書の中で目につくことは、「僕はひとりだ」と四回もくりかえし叫んで、孤独の空しさを訴えている。

親の温かい愛情とおもいやりで用意された筈の勉強部屋が、よもや、わが子の冷たい墓場になろうとは親は夢想だにしなかっただろう。

その子の葬儀もとどこおりなく済んで、十日ほどたつ

てから、お線香をあげに立ち寄ったとき、仕事が手につかないのだろう、両親とも、そろって家にひきこもっていたが、涙ながらに私にこんな愚痴をこぼしていた。

「死ぬ程学校が嫌いだったら、なにも無理して行くことはなかったのに、先生も先生だと思います……あの子は出来るから大学は心配ありません」

などと、言っていたのに、

「その実は、死ぬほど学校をきらっていたんですね……長い時間子供を学校にあづけておいたのが間違いました」

と、一方的に学校や先生に対する批判めいたことばかりならべたてて嘆いていた。

私は、黙って聞いていたが、このごろ、よくある型で、失敗をみんな他人のせいにする無責任型で、親としての、自分達じしんへの反省など全くないので、これじゃあ、亡くなった仏さまが浮ばれないと思ったので、

「あまり、学校や先生のことばかり言いなさんな。亡くなった仏さまは……誰れの子なんだい、学校の子じゃあないんだよ」

と、余計なことだと思ったが、そう言って反省を促し

てやった。

父親は、私の後輩で、小さい建設会社の社長、母親は藤間流の踊りの師匠で、かなり多勢のお弟子さんをかかえて、町の中心部に稽古場をもち、その経営に夜となく昼となく懸命のようだった。

ただ一人、同じ町内に嫁いだ姉が買ひものなどの帰途によく立ち寄っては、弟の受験勉強をばげましていたようである。

両親とも、おのの自分達の仕事を持っていたせいか、世に言う教育パパでも教育ママでもなく、一見ごく平凡な幸わせそうな中流家庭のようだったが、こんな家庭に突如おこった、とりかえしのつかない悲劇だったのである。

それから、二カ月ぐらいたった、ある日、ふと街で、この父親と姉娘に出会い、近くのコーヒー店でその後の話を聞くことにしたが、五日ほど前に納骨をすませ、家であれ以来はじめて伴の部屋の片付けをし、日誌とも、詩稿ともつない、たくさんノートを見出し、今さら、どうにもならないが、何回も、何回もあの子に詫びを言いながら読んだんですよ……どの頁もどの頁も、涙で滲

んでいない頁はありませんでした、と言って目にいっぱい涙をためていた。

ついつい仕事が忙しかったし、手不足もあって、伴と接触する時間が、すくな過ぎたことを後悔しているし、子供にとって、こんなにも親の愛情が大切なものだったのかと、今更ながら教えられたんです。

世間には、いろいろな子供さんがいる——我假だけが昂じて自殺する子、非行に走る子、さまざまですが、うちの子の場合だけは、私たち夫婦の過ちでした。と言って、また、目にいっぱい涙をためていた。

その日は、ついに学校や先生のこととは、一言もふれなかったのである。

激しい競争社会の中とは言え、自分達の築城のみに追いまくられ、人間として、親としての思いやりを後まわしにしてしまうと、家庭を豊かにするのは財力のみと頭からきめてかかる、豊かな家庭づくりの要素の中で、極めて重要な位置を占めている家族間の愛情の問題、慎しみとか、思いやりとか、家庭内でのコミュニケーションの大切さを忘却してしまっている、いつの場合でも、悲劇の原因は、たいがい親の側からつくり出すものだ。

日常、いいものを食べ、いいものを着て、沢山の小遣いを持ち、贅沢三昧で暮らしているが、その割りに、日本の子供達の満足度は他の国々に比べて最低だそう。心温まる愛の日常がないからだろう。

電車の中の「シルバースーツ」の前に老人や身の不由な人がたつていても、自分から進んで席を譲る子供は先ずいない。英国の子供は車内で立つのが普通とされている。

人間としての思いやり、家庭の団欒とやすらぎが欠如しているから、子等も必然的に自分本位の考え方になるのは当然である。

ここにも、家庭と親の責任があるようだ。

× × ×

戦後、間もなく「マイホーム」なんて言う安っぽい言葉が、はやりだしそんな言葉に幻惑されてか、たまたま、極度の住宅難とからみ合って、猫も杓子も「マイホーム」志向で家族構成が、大家族主義から核家族主義にうつり変わり、さらには、小さい一ツ屋根の下なのに、やたらに鍵のかかる部屋が（とりで）のようにつくられて、自主性を養う為めなんて言う尤もらしい理屈がつけ

られているがその実は極度のエゴイズムと意固を助長させる結果となり、はては親子兄弟の親愛感も失なわれ、排他的で、調和をのぞまず、隣人を愛することを知らない閉鎖的な自分勝手な利己主義者を製造してしまふ。

ゆたかな心のやすらぎも、温かさもなく、父母への慕情などかけらもない、人間の姿をかりた冷血動物の集団が氷のように冷たく閉ざされた家庭の中で、やがて来るであろう、家族離散の悲しい運命をまっている。こんな現状が、いま、地域の到るところで見られる今日なのである。

いま、日本の小学生は、四人に三人、六年になると十人に九人が自分の部屋をもっているそうだ。

子供に勉強させたいと思う親心はわからないではないが、その殆どどの部屋にテレビが置かれ、一日二時間勉強する子供は十人に一人位だとか。若し誤りの言語などで放映されれば、子供達はそのまま誤りの言語を覚えてしまふ。それも見飽きると、マンガで時間をつぶす。今、中三の子供の半数が一カ月に一冊の本も読んでいないと言われている。

今、日本では全国に「子どもの本の専門店」とされて

いる書店が五十数店しかないそうで、しかも、この種の書店はマンガとか低俗雑誌は取扱わず、所謂、純児童文学ものしか扱っていない為か、その売行きは最悪の状態だそうで、出版社も書店も、その対策で苦慮しているということである。

子供に部屋さえあてがえば、事足りりとする親の無慮と無分別がこの子らを甘やかし投げだし、勉強どころか怠けることだけを、子供達はこの域の中で覚えるのだ。

月に一冊の本さえも読まない者が、なんで今の日本の学歴社会がうみだした、この激烈な受験戦争に立ち向えるのか、ある母親は「子供の将来の為め」とばかり、けたたましく子に勉強をしいる、子は、これを干渉だと言って、遂には親と子の「絆」をさえ、うとましく思いはじめ。

自分の居城に鍵をかけて入室を禁止する子供などはさらにいる。ときどき城からとび出しては家族の者に暴力沙汰におよぶものもある。こんなになるまで甘えさせた親の責任も大きいが、「ひずみ」の多すぎる地域社会の責任も、不完全な学校教育にも責任がないとは無論言えな

い。

親も、学校も、ときには子供を「千仞」の谷底へ蹴落すくらいの覚悟は必要だろう。

教育の荒廃の元凶は文部省の誤れる文教政策だと言って教師は文部省をせめ立てる。子供の非行や悪化の原因は、家庭に於ける父母の甘やかしと溺愛教育が主原因と文部省は甘い家庭のありかたを批判する。一方、家庭がわから言わせれば、子供の教育など二の次にして、自己中心主義で明けてもくれても、ストストストで教育の何んたるかを忘れていると学校側をきびしくなじる。三ッ巴の泥試合である。

イギリスでは、一クラス三十人、アメリカは州によって異なるが、一クラス三十人から二十五人と言われているのに、日本では一クラス四十五人と言うのが現状だ。

年間、一機ジェット機の製造を中止すればその浮き出した経費で、一クラス三十人にする為の教師の増員分の給与その他の雑費までまかなえるのだそうだが、文部省としてもなかなか実現は不可能だろうし、教師を増員するよりも現在働いている教師の待遇を改善することの方が先だと言う組合の動きもあってこの問題なかなか容易

に解決はできないようだ。

その、いづれが真実か知る由もないが、ともあれ、現在の学歴社会の悪弊が必然的に有名校を作りだすから、受験戦争をますます激化させ、全国で五万もあると言われている塾は受験の為だけの勉強に子供等をかり立てている。そこには、人間性の陶冶もなければ、情操教育も、奉仕の為の精神教育も全く望まれないのである。

子供達の社会に非行がはびこり、はては殺人行為にまで及ぶ最悪な事態を招いているのもみんな、大人の社会の無責任と無分別が原因だと極め付けられてもしかたがないと思うのである。

一九七七年一〇月の東京の「開成高生殺人事件」などは、学歴社会の悪弊が生んだ悲しい事件で、その翌年に母親が、父親に殺された息子健一の後を追っている。なんと言う、悲しい家庭内の悲劇だろう。

先達って、ある新聞で「警察白書」の抜萃と言うこんな記事を読んだ。

「わが国では、殺人の半分以上(五七%)が肉親や親族によって行われている。日本人は一日に二人ずつ肉親に殺されている」

読んだ後で、この抜きが恐ろしく馬鹿げていて信じられないような気がしたが、昨今の世情は、たまたま、この白書の抜書を裏付けるような情^{なさけ}ない事の連続で、どこに血族の血の、肉の「絆」があるのか、人の道を忘れた外道の世界が、そこまで来ているようで恐ろしい。

x

x

x

思えば、一九四五年（昭和二十年）一二月超国家主義、軍国主義の精神的支柱を形成せしめ、日本を戦争に導き入れた特殊教育と断じられ当時日本に駐留していた連合国軍の指令により修身教育が排除されて、今年で早くも三十五年の歳月が過ぎたが、もともと、この修身教育なるものの基本理念は一八九〇年（明治二十三年）に発布された「教育勅語」にもとづいたもので、わが国の道徳教育の中核をなしてきたのであるが、ときに、一部の超軍国主義者の輩により修身教育の基本理念に悖る軍国主義的色彩に塗りかえられた一時期こそあれ、そもそも、一八九一年（明治二十四年）の「小学校教育大綱」には（修身は教育に関する勅語の旨趣に基き児童の良心を啓培して、其の徳性を涵養し、人道実践の方法を授くるを以て要旨とす）と敝に定められており、爾来、長年月に渉り、日本独特の

修身教育を中軸とした、すぐれた道徳教育が、偉大なる指導力となって国民教育の中核をなしてきたことは特筆に値する事実なのだが、この、修身教育と言う国民教育の基本を失って三十五年、道徳の退廃、青少年の不良化、倫理の低落等々、遂には昨今のこの荒廃を日本全土にもたらしてしまったのである。

三十五年もかかって、ぶち壊した国民性をもとの正しい姿に戻すには、先ずは三倍の百年はかかるだろう。

しかし、こんな墮落した世情を、あるいは地下で、我が意を得たり、とひそかに喜んでいる御仁がいるかも知れないと思うと、しみじみ、「勝てば官軍」だなどと思わざるを得ないのである。ここまで墮ちた世の中である。そう性急になおるものではないが、社会も学校も家庭も大きな反省の中で、再建に向って奮進しなければならぬ時機だと思うのである。（つづく）

新会員のご紹介を広くお願い申し上げます。お知り合いの人やお檀家の皆様に呼びかけて、一人でも多くの読者をご勧誘下されますれば、幸いです。

法然上人讃仰会



念佛ひじり三国志 (其)

— 法然をめぐる人々 —

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

時雨沢。

呼び名のとおり雨気に馴染みやすい湿土であった。周囲をかこむ霊鷲山の峯々が晴れている日でも此処の沢だけは霖雨で煙っていた。

漆黒の夜空が雨をよんだ。勢至堂の廃室に端座し、口誦念仏に励んでいた住蓮はやがて肩がぐっしりと濡れていることに気づいた。破れ屋根から吹きこむ雨脚はかなりの強さだった。

住蓮は坐位を、主なき仏壇の直下に移動させた。そこ

だと屋根は未だ万全であった。

この建永元年（一二〇六）の師走、京洛の気温は例年になくゆるんでいたようだ。藤原定家の「明月記」も前半は雨の記述が多い。ようやく月半ば十四日の晩から「夜、雪。庭草ヲ埋ム」とある。

時雨沢の山中、夜もふけて降り出した雨はきびしい冷気をふくんでいた。

住蓮は全身を凝結させてその冷気に耐えた。念仏を唱え続けることで忘れ去ろうとつとめる。

しかも空腹だった。ひる下がりに清水寺で粟飯を饗されて以来、一物も食していなかった。冷気はその空腹に

こたえた。

でも住蓮は勢至堂から一步も出ようとはしなかった。今夜は此処で夜を明かすのだ、と自らに命じている。

なぜか。

思考は明確に整理されていなかった。ただ、安樂房遼西と約束した鹿力谷の別時念仏会へだけは絶対にゆかない。その決意だけが住蓮をこの勢至堂へ縛りつけている。

ふと、今ごろは……と鹿力谷の精舎を思いえがいたりする。

六時礼讀も佳境へはいった刻限であろう。法悦に酔いしれたひじりたち、善男善女の同信たち——

今ごろは夜食の芋汁が饗されているのであろう。あの美味と熱気。

寒さと空腹が住蓮にそんな食物ばかりを思いえがさせる。

それにしても、と今夜なぜ俄かに同志安樂房を忌避したくなったのか。住蓮にはおのれの心の支点が不明だった。

安樂房遼西の、いったいどこに忌避すべき理由があつた。

前号のあらすじ

法然上人の教えやその人となりとは、今日では広く人口に膾炙している。そのお弟子たちの専修念仏教団の動向も、次第にわかりつつある。それでは一体、法然上人をはじめとする専修念仏の人々の実際の生活振りはどんなものであったかという、実はこれがまったく判じがたいのである。

ここに一つの類推として、そのお弟子禪勝房が木工番匠として、大工仕事やその監督をなりわいとしたように、法然上人のまわりの人々も、いづれなにがしかの勤労生活を営んでいたことも、またありうることであつたろう。「没後起請文」に見える、坂下の蘭、洛中、高畠ノ地などの莊園で、畑仕事に従事する専修の徒もいたはずである。記主禪師良忠上人は、みずから魚をとったわけではないが、魚の販売など、漁にかかわるなりわいに積極的であつたという。

たのか。

その輕薄才子ぶり。貪慾な權力志向か。

いやいやそんな欠点は長年の付き合いで百も承知だった。同志としてすべてを許容してきたはずである。

住蓮には、わからない。

思考や情念を離れたカンのようなものが、強く住蓮に戒告を加えてくるのだ。

今夜だけは鹿力谷へおもむいてはならない。安樂房と

会ってはいらない。

そのカンのようなもの、とは何か。

住蓮は突然、念仏をやめた。耳を澄ました。

戸外がひそやかな物音がする。それも足をすらせて雨道を踏んでゆく気配のようなものだけであった。

人間ではない。四つ足の獣が這い歩いている。

とぎ澄ました聴覚の先で、住蓮はその正体をたしかめ得た。

ひそやかな足音は勢至堂へ接近した。雨水をはじく気配がとどえた。

勢至堂の建物に取りつき、内部の様子をうかがっているのかもしれない。

猪か、鹿か。それとも狐であろうか。

住蓮はじつと羽目板が剥がされた闇の一点を凝視した。侵入してくるとすれば、そこであろう。

うなりを生じた風が大量の雨を堂内へ持ちこんだ。鋭い雨脚がその破れ羽目から侵入した。

それがやんで、破れ羽目の空間に闇が戻ったとき、住蓮はそこに白い影像を見た。

四つ足の獣ではなかった。明確に人型をえがいてい

る。白衣を着こんだ人間が立っていたのだ。

白いのち衣服だけではなかった。白衣の背に垂れた長い髪もまっ白であった。老婆である。

不思議なことにその老婆、室内に背を向けて闇の戸外を眺めて立っているのだ。

「中へはいったらどうか。そんなところでは濡れる」

住蓮は声をかけた。

老婆はゆっくりと身をめぐらした。

格別に異妖ではなかった。普通の老婆である。いや、その立像には年齢に似合わぬ艶色がかぼれている。

「おや、こんなところで何を」

驚いたり恐れたりする気色もなく、老婆は住蓮をまじまじと見つめてきた。

「念仏している」

「ここは妾の住居です」

「そうだったか。しかし、ずっと以前、わしも住んでいたことがある」

「おや、もとは貴僧（あなた）のものだったのですか。ほつたらかしにするもんで、こんなに荒れ果てて……」

しかし、老婆の顔には親しみをこめた笑いがあった。

<姥(おんば)>



僧形の住蓮に気を許したのであろうか。

年老いてはいるが、鼻筋のとおった端正な面貌である。声も透明だった。

「あなた、お腹が空いてはいませんか」

「うむ。ひどくひもじい」

「妾もですわ。お待ちなさい。いま姥(おんば)がおいしい御馳走を作って進ませましょう」

こんな山奥に暮す老婆にしては流暢な町言葉だった。

老婆はもの馴れた足取りで仏壇の裏手へ消えていった。

盗賊か狐狸の棲家だと思っていた時雨沢の勢至堂が、こんな優雅な老婆を主(あるじ)としていたとは……住蓮は立ちあがると、老婆が消えたあとを追ってみた。

勢至菩薩像を安置した仏壇の裏側は、下屋造りの物置だったはずだ。住蓮はそこに仏具などを入れておいた記憶をよみがえらせた。

いま物置の外壁の羽目板は消失し、柱と屋根だけの軒先のような結構と化していた。

小石をつんだ簡単なカマドがあり、大ぶりの鍋がかけられ、その裾にしゃがみこんだ老婆が背中を丸くして火

吹き竹を使っている。

住蓮の気配に老婆はふり向くと、

「米も粟もありませんよ。これだけです」

と足もとの山芋を指さした。

「芋汁か」

呟いて、住蓮はその言葉にこたわった。

今ごろ鹿カ谷の精舎では、みんなが芋汁をすすっていることであろう。

「同じ芋汁でも姥（おんば）のはたっぷりこれを入れるから」

とカマドの上の棚から甘草の束をおろした。どこのものよりも美味だというのである。

二

老婆――

と、呼ぶのはやめておこう。彼女自身が自称するよう
に姥（おんば）、山姥と呼ぶべきであろう。

この山姥の自慢に嘘はなかった。

鍋ごと運びこまれた芋汁は、たっぷり甘味がしみこんでいて、住蓮は何杯お替りをしても飽きなかった。

山姥も負けじと腕をかさねてゆく。

ようやく腹もくち、冷気が五体から脱け落ちた。

「ところで姥、こんな山奥で毎日何をしているのだ」

「山姥の仕事ですよ」

「山姥の仕事だと？　山姥と申すのは山に棲む鬼のことではないのか」

「それは世間が誤って言い伝えているのです。本来山姥とは、山中で貧しく暮している人たちに手を貸して歩くの仕事をしています」

「鬼ではないのか」

「つい今も、ここから峯一つ奥の山家にいたのです。貧しい木樵りで、娘と二人だけで暮しています。その娘は朝から晩まで機（はた）を織っています。いくら働いてもたいした賃銀にはなりません。可哀そうなので、そっと窓からのびこんで、機織りを手伝ってあげるのですよ」

「姥よ。此処に棲みつくまで、おぬしは何をしていたのか」

「さあ、何だったのでしょうね」

「何かはわからぬが、街で暮していたな」

「そう見えますか」

「とても山家育ちとは思われぬ」

「ホホホホ、山姥が、初見のあなたにそうも簡単に前身を見抜かれるようでは……」

笑いくずれた腰の曲線に、あだっばい挑発が流れた。

「白拍子か」

「西ノ洞院で舞っておりました」

「舞姫か。ひとつ舞ってみせてはくれぬか」

「ひじりさまが遊び女の舞いがご希望ですか」

「ひじりとはな、ナマ身の人間がそのまま得度した僧を言う。だから妻がいたり、愛をかわすこともある。女のひじりには夫もいる」

「女人でもひじりになれるのですか」

「なれいでか。得意の舞いは何かな」

「はい。まずはご覧になってから」

山姥は立ち上がると、帯にさした舞扇を抜きとった。さすが白拍子のたしなみであるのか。こんな山家暮らしになっても舞扇だけは身から離さないようである。

住蓮の面前に立った山姥の姿には微塵も老いや崩れが感じられない。歌いだした音吐も朗々とひびきわたっ

た。

へひげにこのうえはともかくも

言うにおよばぬ山中に

後に至って謡曲「山姥」に修成された「今様」であつた。

山中をさまよう老いたる妖精の生態を、往年の名妓白拍子は迫真の舞いで描きだしている。

往年の名妓とは言うが、現実には山姥となっているのだから、迫真の演技でないわけがあるまい。

鬼気と妖気がこもこも入り混じって雨のしたたる廳堂に満ち、眺める住蓮を幻想の彼方へいざなつた。

白髪だけは残しているが、すでに老姥の姿態は若い遊び女の肉体がよみがえっていた。彼女の前身は「百魔山姥」と呼ばれた白拍子であった。宴席で、山姥の舞いを迫真に舞うことから名づけられた通称が「百魔山姥」なのである。

妙なメロディにのって流れていた彼女の舞いに突然乱れがきた。白衣の裾でも踏んだのであろうか。俄かに

体線をゆがみ、住蓮の眼前にへなへなと崩れ落ちたのだ。
った。

「どうした？」

「……」

覗きこむ住蓮の首へ白く長い手が巻きついてきた。

「何をする」

「ひじりさまは何でも許されるとおっしゃいました。このあわれな姥（おんば）を慈しんで下さいまし」

「そんな……」

「お嫌ですか。こんな老婆では」

「……」

「こんな老婆でも、昔は若うございました。でも今だつて、ほんとうの姿は若いのでございますよ」

「……」

「嘘だと思ったら、お試めし下さいまし」

巻きつけた手首に必死の力を加えた。老婆の肉体が迫る。幻想は未だ途切れてはいなかった。甘ずい芳香が住蓮をくるんだ。ふれ合った老婆の肌は、着衣をとおしてだが、若い弾力と活気にあふれていた。とりわけ驚かせたのが老女の胸のふくらみだ。

外見の薄べったい輪廓はまがいであった。白衣の胸へ手をさし入れた住蓮は、掌心にしっかりと固い丸味を確認してしまつたのである。

「試めしてみよ、と言うのか」

住蓮は身体を傾けて老婆を押し倒していった。

「必ず、きつとお試めしになったことを、お悦び頂けると思いますわ」

男におさえこまれた劣弱な体位の下で、しかし老婆は確信に満ちた笑みを投げかえしてきた。

住蓮は幻想の世界へ溺れこんだ。老婆の、想像もつかぬような若い肉を実感しつつ、遠い昔南都の無頼な衆徒だつた青春をよみがえらせていた。

やがて老婆は、住蓮の手枕へ顔を横たえ、深いまなざしで男を見つめていた。住蓮の方はしきりに襲ってくる睡夢と闘わねばならなかった。

「あなたと妾とは、今宵限りでお別れすることになるでしょう」

呟くように老婆は言った。

「そんなことはない。わしはいつまでもそなたを愛しつづける」

「ご無理をおっしゃらなくてもよろしいですよ。誰がこんな老姥の身体を、再び抱くでしょうか。でもこれだけはおぼえておいて下さいましね」

「何だ」

「どんな方を今後、お抱きになっても、それは妾であるということ」

「どんな方をだど？」

「そうです。別の女人です」

「ひじりのわしに、そんな機会は二度とあるまい。自らもいましている」

「いいえ、一度お負けになったあなたは、必ず二度目もお負けになりますよ。そのとき、妾のことを思い出して下されば結構なのです」

「そんな弱気を口にするではない」

「弱気ではないのですよ。外見は姥（おんば）でも、内容が水々しかったと同じように、外見は若い女人でも、ほんとうの中味は姥だったということです」

「……」

「仏も昔は人なりき。われらもついには仏なり。三身仏性、具せる身と、知らざりけるこそあわれなれ」

老姥の言葉は「今様」のメロディになっていた。歌声は子守唄のように住蓮の耳を洗っている。深い睡魔が彼を遠い世界へ連れ去っていった。

老姥はやさしい指先で住蓮の首すじを、いつまでも撫でまわしていた。

三

昨夜の雨が嘘のように東山の山峡は朝の光りでぬぐわれていた。

住蓮はその陽光で臉を射すくめられ、身を起こした。かたわらに老姥の姿はなかった。

仏壇裏の厨を覗いてみた。そこにもいない。ばかりか朝餉の仕度にかかった気配もない。昨夜、食べ残した山芋の大鍋さえ、どこかへかき消えていた。

それでも気分爽快だった。住蓮は勢至堂を出ると、下の溪流で洗顔した。ふり仰ぐ靈鷲山の山頂にある朝の日輪を拝しつつ、声高らかに念仏をとなえた。

さわやかな朝風が峯や谷をわたって吹き寄せてくる。いや、さわやかではなかった。住蓮は突然念仏をやめて、鼻翼をうごめかした。異様な臭気を朝風が送りこん

できたのである。

はて、何の匂いであろうか。

住蓮は、その臭気をたどって北側の尾根目ざして登りはじめた。その尾根は屏風のように切り立っている。岩山であった。

尾根へ登りつめると、東のゆくてには岩の山瘤がふくれあがっている。そこのかげから一条の白煙が立ちのぼっているではないか。臭気の源泉はどうやらこの白煙らしい。何を焼いているのだろう。

山瘤へ這いあがったとき、住蓮は白煙の実体を知った。

山瘤のかげには樹林がひろがり、その奥で十数箇の人影が白煙をかこんで何やら儀式めいたことをやっている。間喝的に鉦固を打ち鳴らす音が響いた。

念仏だ、と住蓮は山瘤を降りてゆきながらたしかめ得た。打鐘に調声されて、その十数人の山家衆たちは念仏を合唱しているのだった。

こんな山奥にも念仏の講中が、と住蓮は喜色を満面に浮べて歩度を速くした。

念仏の輪は、燃える枯れ枝の白煙をとりかこんでい

た。燃えているのは枯れ枝だけではない。その下に、すでに形を崩した肉塊があった。

人体を焼いていたのである。火葬の集いであった。

住蓮は念仏の輪へ割って入り、念仏に唱和した。

先達らしい男は、鹿皮を着こんだ髭むじやらの狛師風体であった。しかし、鉦固を打ち鳴らす手付きは馴れたもので、合唱の調声ぶりも鮮かだ。

狛師は鉦固を乱打して念仏を打ち切った。

「さあ、もっと火勢を強くせよ。こんな朝焼けの日は、午後になると雪だぞ。雪でしめってナマ焼けたとおババ、極楽さまへ往けぬぞよ」

うながされて、老若の男女たちは枯れ枝や落葉を死体の上へ投げた。肉塊をくるむ炎は威勢よく立ちあがった。

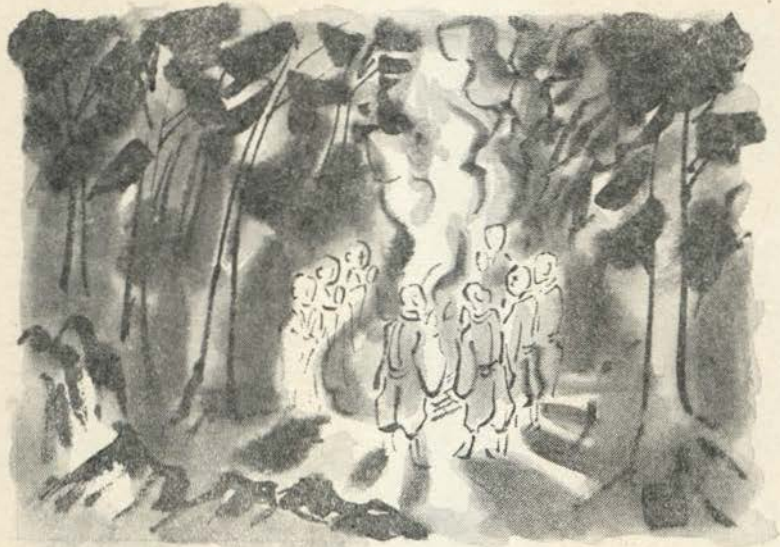
「おんぼう（御坊）さま、その極楽のお話を」

と、女の一人が狛師にたのんだ。

おんぼう――

現代にも残っている火葬をつかさどる者の称だ。当時
は「三昧ひじり」とか「御坊ひじり」と呼ばれていたようである。俗業にたずさわりながら、死者の葬送をつか

＜樹林の中の人影と白煙＞



さどりと、その処理だけではなく、鉦を叩いて念仏をリードし、あまつさえ浄土往生の説法までやったらしい。当然、おんぼうさまは賤職ではない。庶民の間で尊崇を集めた立派な私僧なのである。

だいたいこの国の葬礼は、民族宗教だった神道の「穢がれ」の思想から上古では死体は原野や山上、水中に遺棄されてかえりみられなかった。それが仏教の伝来で手厚く葬る儀礼が習俗化した。

だが、大化の改新が再び「薄葬」を強制した。日本人が貧乏なのは葬礼に必要以上の財を傾けるからだ、ときめつけた。律令では葬令の規模を人員で制限し、華美に至らぬように規定している。

高貴な人々はこの律令を遵守したが、庶民はそうはいかなかった。いとおいしい肉親との別離である。その墳墓を飾りたいのが人情である。

庶民には官度僧を招くだけの資力も資格もなかった。ごく自然な生活の智慧として、自分らの仲間うちから三昧ひじりや御坊ひじりをえらび、彼らに葬礼のすべてをゆだねたのである。

三昧ひじりとは、比叡山にある念仏別所、常行三昧か

ら由来している。つまり浄土思想は、肉親の葬礼という身近な、切実な体験のなから自然発生的に庶民の間へひろがっていった、とも言える。

「このおババはな、その昔、京の街で名のある白拍子であつたそうな」

眞師のおんぼうさまは語りはじめた。

住蓮はぎよつとなつて、身をそばだてた。

「舞いの名手で、法皇の御前でも何度か舞つたそうな。

それが源平の戦乱で、愛児（ややこ）に死なれ、亡骸をこの奥所へ埋め、そのまま住みついた。みんなは山姥（やまおんば）などと言うておつたな」

住蓮はあわてて炎の下肉塊を覗きこんだ。その着衣をたしかめたかった。

すでに殆んど焼け切っていたが、わずかに小袖のひときれが肉塊にこびりついていて、まぎれもなく白地の着衣であつた。

「おババは、ちょっと頭がおかしくなつてはいたが、そりゃあ心のやさしい女だつた」

会葬の男女たちは、みんなうなずいている。貧しい山家の娘の機織りを手伝つてやつたという話もほんとうの

ことであらう。

「おババは念仏をようとなえた。この向う東山に住まわれる法然さまの教えによると、念仏を申す者は誰彼の差別なく、間違ひなく阿弥陀さまのお慈悲によつて極楽お浄土へまいれるそうな。頭のおかしいおババでも例外ではあるまい。早く焼きあげてな、ひと足先に往っている極楽さまの愛児（ややこ）のもとへみんなして埋めてやろうぞ」

ほんまに心やさしいおババじゃつた、と老若男女は口々に語り合ひはじめた。おんぼうさまの素朴な極楽説法は終つたらしい。

住蓮は髭の眞師の前へすすみ出た。

「このホトケは、いつ亡くなられたのかな」

「おババか。ゆんべのことぞ」

「昨夜……刻限は？」

「未だ明るかつたのう。雨が降り出す前じゃつた」

「どんな往生で？」

「それは立派なものであつた。日がな一日、三郎太の娘の機織を手伝つてな。昔の舞いをひとさし舞ってみせると言うてな」

おんぼうさまは人垣の中に生き証人を求めた。木樵りの三郎太という男が歩み出た。

「わしの住まいで息を引き取ったのじゃ。日がな手伝ってくれたゆえ、山芋の汁を馳走し……」

「山芋の汁をか」

「それに大好物の酒もちつとばかり振舞ってやったぞい。おババはうまさうに飲んでな。ホロ酔い機嫌で舞うたわ」

「そりゃ美しい声で今様も歌いなすった」

と、木樵りの娘が助言した。

「どんな今様だったかな」

「わし、おぼえとる。仏も昔は人なりき、われらも終には仏なり……ああ、おババはほんとに仏になってしもうたわ。舞いをひとさし舞い終ると、ぼったり倒れて」

「ぼったり倒れて……」

住蓮は異様な幽気が胸廓の内を吹きぬけてゆくのをおぼえた。

その、ぼったり倒れた姿勢で、自分はおのおババと婚(まぐ)わったのではなかったか。今様にしても、昨夜眠りへ落ちる直前、添い寝の枕ではっきりとこの耳で聞い

たものではないか。

とすると、自分が婚わった相手、若々しい肉体を持っていた老姥は、すでに死の国へ去った幽魂だったのであろうか。

「おぬし」

と、おんぼうさまの狛師があらたまった表情で声をかけてきた。

「……」

「おぬし、何度か見かけた顔じゃな。さよう、東山の法然さまのおそばにいたことはないか」

「うむ……」

「やっぱりそうか。わしは時折、法然さまのお説法を聞きにゆくが、おぬしの顔を何度か見たぞ。とすると、高足のご門弟でいらっしゃるのか」

「高足などではない。門弟のはしくれだ」

「ひじり名は？」

引っこみがつかなくなった。

「住蓮と申す」

とだけ告げた。

舞見御中

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇一	大正大学 電話(〇三)九一八—七三二一代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六	佛教大学 電話(〇七五)四九一—二二四一代表	淑徳短期大学	学長 長谷川良昭	〒174 東京都板橋区前野町五—三—七	京都文教短期大学	学長 大橋俊有	〒611 宇治市槇島町八〇
埼玉工業大学	松川文豪	淑徳高等学校	里見達人	鎮西学園理事長	上田祐規	上宮学園理事長	鵜飼隆玄	祐天寺	巖谷勝雄
東山学園	石井俊恭	東海高等学校長	滝 俊立	〒496 津島市神守町 阿弥陀寺住職 社会福祉法人 神守保育園理事長	稻田稔界	祐天寺	巖谷勝雄	祐天寺	巖谷勝雄

舞見御中

無量山 伝通院 住職 大河内秀敏	九品寺住職 漆間 純成 〒530 大阪市北区同心一―四―八	回向院 本多 清敏 〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇	九品仏浄真寺 清水 順碩 東京都世田谷区奥沢
蓮勝寺住職 神奈川県仏教会副会長 柴田 敏夫	称名寺住職 須藤 隆仙 〒040 函館市船見町一八―一四 電話(〇一三八)二二―一五七八	中島 真哉 青山 梅窓院 〒107 東京都港区青山二―二六―三八	教安寺住職 野呂 幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六―二 電話(〇四四)二二二―四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一 清岸 寺 原口 徳正	華陽院 堀田 良謙 〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八 電話(〇五四二)五二―三六七三	〒030 青森市本町一―一―一二 正覚寺 楠美 知行	光運寺 飯田 信弘 〒510 四日市市中部三―一二―

舞見御中署

廣隆寺住職 谷地 益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一丁目	晴雲寺住職 塚田 弘導 〒254 平塚市立野町六一五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林 忍戒	龍泉寺住職 瀧沢 教夫 〒405 山梨市市川二一五一
お骨仏の寺 一心寺 高口 恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪上之町一五五 電話(〇六)七七一一〇三七二(代)	知恩院布教師会九州支部長 聖徳寺住職 金子 貫達 〒850 長崎市錢座町四一五九	光明寺住職 山口 諦存 〒673 明石市鍛冶屋町五一二〇	新善光寺住職 太田 隆賢 札幌市中央区南六条
浄土宗新潟教区長 照專寺住職 川端 大祐 〒947 小千谷市寺町二八五一	北川 一有 長寿院 〒111 東京都台東区鳥越二一三一一八	遍照寺住職 宇佐美 諦練 〒461 名古屋市中東区泉二一九一三三	仏生山法然寺 細井 俊明 細井 照道 ○暑中 万灯会修行中

舞見御中署

〒113 東京都文京区本郷一―八―三

昌清寺

住職 服部 仙順

電話(〇三)八一―一三三七

檀王法林寺

だん王保育園・児童館

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

光明寺住職

白幡憲佑

横浜市南区庚台(久保山)

西住院

戸川 靈俊

〒606 京都市左京区黒谷町三〇

近龍寺住職

松濤 弘道

〒328 栃木市万町二二―四

電話(〇二八)二二―〇八〇二

芳泉寺

柳 楽真純
なぎ ら しん じゅん

社会福祉法人 大慈会・かんぎおん

〒386 上田市常磐城三―七―四八

浄土宗議會議員

安国寺住職

大田 秀三

〒370 高崎市通町九〇 慈光ビル

金田 明進

〒302 取手市白山二―九―二八

弘経寺

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十六卷 八月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十五年 七月二十五日 印刷
昭和五十五年 八月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八―八二―八七番

舞見御中

総本山 知恩院

門主 高畠寛我

浄土宗 宗務庁

浄土宗 東京事務所

大本山 増上寺

法主 藤井実応

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 宮本文哲

大本山 光明寺

法主 石井真峯

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕生寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従軍道路大阪より二時間

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤密雄

〒248 鎌倉市長谷四―二―二八

滋賀 福泉寺
敦賀 西福寺

鵜飼隆玄